

2009年から始まったふれあい夜市は、昨年の開催で10年目を迎えた。これまでを振り返ってみると、2014年と2018年は台風の影響で開催できなかったが、2009年からこれまで、年数を重ねるごとに観音寺市民の参加数や知名度は確実に上昇してきた。開催当初、参加人数は約400人だったが、2017年は約2000人。

まずは、ふれあい夜市が始まったきっかけについて触れたいと思う。私たちの地域には、昭和時代、夏の毎週土曜日に「土曜夜市（通称土曜デー）」というイベントがあった。小学校の帰り道、その準備をしている光景を見ながら、みんなワクワクしたものだ。約60年続いたこのイベントも、観音寺市の過疎化に伴い消えてしまった。消えてしまった寂しい記憶は今も覚えている。「人は何かとつながりがあったこそ人間でいることができる。人がつながる時間や場所や心を消してはいけない」私たち実行委員



ストリート棒高跳びショー

会は、人のつながりの大切さ、必要性、そして人間として仲間と乗り越えていくこと：いわゆる共生社会が感じられる時間と場所と心をもう一度復活させるためにこのふれあい夜市を始め、続けてきた。

福祉とスポーツと

まちむら発見①

同じものを同じ場所で 同じように共に楽しむ

香川県観音寺市 ふれあい夜市実行委員会



地域のサッカースポーツ少年団とミニサッカーを楽しむ地域の子どもたち

ができたことは、共助の社会、地域づくりに貢献できた大きな成果である。福祉と他分野が融合することは発起人である毛利公一氏の思いでもある。毛利氏は観音寺市出身の棒高跳び選手だった。オリンピックへの夢を持ち、アメリカ留学中の不慮の事故により現在は車いすの生活である。地元へ帰ってこれまでの生活とは一変してしまっただが、どんな身体状態でも自分らしく生活することを望み、周りの人たちとも豊かな共助の世界を願っている。

福祉団体の屋台にはルールが二つ設けられている。一つ目は、「普段施設で作っているものはメインの商品とせず、焼きそばやフライドポテト、フランクフルト等、市民のみんなが持っている屋台のイメージを出して販売すること」。二つ目は、「イベントの最後まで参加すること」。これらのルールは、障がいの有無に関わらず、同じ観音寺市民の屋台として一体感を持ち、相互に違いはなく同じ市民であることを意識してもらうためである。屋台で

文化、そして教育、行政という分野が10年間のイベントを通じて団結したことで、普段でできない新しい試みができた。福祉とは違う分野の方々が障がいの者、高齢者について考えながらイベント構築

は福祉とは関わることが少ない市民や団体も場所を共有し、ともに楽しむことができ、ほとんどの店で商品が売り切れたと報告があった。ブースには誰でも立ち寄ることができるように、筆談用ホワイトボードを準備、筆記での注文も可能にし、言葉のバリアフリーも実現した。また、地元企業のPRブースは、今回初の試みだったが、参加した2社は約200人の来客があり、地元の人々へのアンケート調査や事業内容のPRに役立てることができた。出店ブースはおもに福祉団体のブースであるため、それぞれの団体利用者の工賃アップや活動費アップに貢献できたと考えられる。

スポーツ団体は、毎年工夫を重ねて様々なスポーツとのふれあいづくりにチャレンジしている。ふれあい夜市開催当初は地元スポーツの代表である棒高跳びのストリートパフォーマンス披露を行うと共に、子どもたちにも体験してもらっていた。2017年に取り入れたジャンピングMAXでは、小学生から大人まで約40人が、前人未到の30段を目指して挑戦し盛り上がった。県外からの参加者もあり、彼らを通じて観音寺市のPR



福祉団体の屋台を楽しむおじいちゃんとお孫さん
懐かしい床几に座って食事をする光景も

にもなったと考える。

文化団体は、地域の文化活動を発掘している。開催当初から続く手話コーラスや子どもたちの本格的なよさこい踊り、さぬき吉野連の阿波踊りなどが文化団体では特に盛り上がる。他にも地元で地道に活動する高校生バンドや、家族バンドを発掘して市民に広く披露してもらっている。毎年参加してくれる市長バンドも欠かせない存在である。年々出演者数が増えていく中で、緊急車両の通路を確保しながら、2017年は初めて路上にステージを設置したところ、これまでとは違い会場の一体感が持てたと思う。その他、事前の準備で実行委員や地元高校生のボランティアスタッフが率先して、通りの草抜きや清掃活動にも取り組み、町の美化にも貢献している。運営資金は、地元企業が協賛金等で応援してくれている。

分野や世代を超え続いできたこのイベントは、観音寺市民に愛され始めている。立ち上げからこれまで実行委員長を務めている毛利氏はこれからの展望を語る。「これからICTが発達しコミュニケーションの取り方も時代とともに変わってくるだろう。遠方の人とはすぐにつながりすることも可能になり、便利なツールである反面、災害時などで人同士の助け合いが必要な場合、隣人同士顔が見えるつながりが必要だ。だからこそ細々としたものでも構わない、これまでのつながりを大切にし、これから10年、20年も地域の人々が求めてくれる限り続けていきたい」。私たちも実行委員として、この想いを後世につなげていきたいと考えている。

(ふれあい夜市実行委員会副実行委員長 大西立朗)